

横光利一と敗戦後文学

野中 潤

1 わだつみの記憶

ぼやけた一葉の写真がある。一九三〇年(昭和5)夏、山形県豊浦村(現・鶴岡市)の由良海岸で「機械」を執筆していた頃の横光利一が、妻子といっしょに写されているスナップである。このとき横光利一は、痔疾のために手術をして一ヶ月ほど入院した後、保養をかねて由良に滞在していた。白っぽい和服の着流しに麦藁帽子をかぶった横光利一と、同じく白い夏物の洋服を着た妻千代は、白山島おししまへと向かう長い橋を渡り始めたところと見える。カメラに背中を向けた二人に対し、間にはさまり手をひかれた愛息象三だけが、眉をひそめて身体をこちらに向けている。幼い象三は、橋を渡ることに不安を感じ、手をひく両親に抗っているようにも見える。一方横光利一は、海を吹き抜ける風を受けて躰の線を浮き上がらせ、心持ち首を傾けて視線を象三に送り、橋を渡るように促しているように見える。海岸で麦藁帽子をかぶった横光利一の背中が、象三の生まれた年でもある一九二七年(昭和2)の夏に自殺した芥川龍之介のイメージと、写真を見るわたしの中で微妙に交錯する。そうして、ピントのぼやけ具合と幽鬼のような横

光夫妻の「白装束」が、何か不吉なものを喚起する。

もちろん、横光利一が没するのは、十七年後の一九四七年(昭和22)十二月三十日のことであるから、「何か不吉なもの」というのは、わたしの勝手な思いなしである。しかし、そのようなわたしの感覚は、満二十五歳になつて記された、横光象三による次のような回想記のことばにも由来していて、やすやすと否定されることを拒絶する。

何を考へていたのか、父はまんじりともせず立ちばかり、その上布の蚊か飛白の裾や袂を海風にはためかせながら水平線の彼方を見詰めていた。時折、ごぼごぼと烈しく音立てるのは、十米とない私たちの足下が丁度小さな入江風になっている為、波濤の押し寄せる度にぐうつと海面が盛り上がつて来る音だ。そして、それが退くときと云つたら、まるで私たちも一緒に曳き込まれて行く様であった。——海水が濁っているならまだしも、蛍光のような色合いを帯びて澄んだ水中には、断えず身を振らせ合う海草の繁みや磯魚の往来が手に取る様に伺い知れるだけに、私の錯覚

の度を昂めたのであろう。……暫くそうして眺めていた私は、本能的な美の享受と同時にそれに劣らぬ恐怖に駆られ、更に私の存在を忘れたように父が立っていると云う事に私は一層頼りなさを覚え、我識らず父の袖を二、三度引つ張つて云つた。

「怖いねえ。なんだか死んじやうみたいだ。パパ、帰ろうよ」

目交の海面を指示し乍ら^{まなかい}の私は、そのとき父がどんな表情をとっていたか知る由もない。返事がないので振り返えてみたとき、父は私の指す海面をじつと見詰めていた。……私たちの背後で一際音高く波濤が砕け散つた。その水煙が未だ消えやらぬ内だった。

「どうだ、象べえ(父は私をこう呼んでいた)……。パパとあの中へ見物に行くか……」

波音に消されまいとする為だったのであろう、だが私にとつてその唐突な父の大きな声は理由もなく恐怖の頂点押し上げた。……砂遊びのバケツが岩角に弾ねながら転げ落ちて行つた。反射的に父の体にしがついた私は自分の声で総てを払い落すかの如く、現実の安定感を呼び戻すかの如く、無我夢中で泣き喚いていた。……

一九三〇年(昭和5)当時、戸籍によると一九二七年(昭和2)十一月三日生まれの象三は、数え年で四歳とは言え、このときは満三歳にもならない幼児である。果たして父とのやりとりを、こんなにはつきりと記憶できるものだろうか。もしかすると、断崖の父の記憶は、後年



(横光佑典氏蔵)

の体験の断片をモニタージュすることによつて生成された幻影に過ぎないのではないだろうか。

しかし横光象三の証言によれば、このときの記憶は、父横光利一によつて追認されているらしいのだ。

勿論、記憶に鮮やかに刻まれたあの岬の突端での父の言葉は、何の意味もなく口にされたものであろう。否、そうに違いない。第一、あの齢にある私がどうして察知し得たろうか、様々な不吉な予感などを……。他でもない。ただ後年、何かの折にその頃の話が食卓の話題に上つた時、私は次のような事を父が言つたのを想い起して勝手に想像し、関連づけて見るだけなのである。即ち父は言つた。《全く、あのときほど神の啓示を感じさせられた事はなかつた。》

……なぜか私は今日も尚、ふと街中などで呉服屋の店先にある上の蚊飛白を見掛ける度に、砕け散る波濤の響きを耳にするような錯覚に襲われる。(横光象三「回想の中の父」、一九五六年一月『横光利一全集12』月報・河出書房)

山形県由良海岸の白山島は、おそらく周囲一キロにも満たない小島である。緩やかな入江の中央から島へ向かつて、幅二メートルほど、長さ百メートル強の橋がのびていて、その景観から「東北の江ノ島」とも呼ばれている。浜辺から見ると西側に位置する白山島の夕景は、まさに絶景と言うほかなく、日本列島の中で水平線に没する夕陽を見ることのできる場所の中でも、屈指の美しさであると言つてもいいだろう。島の周囲は岩場で、砂浜は殆どなく、磯釣りの名所であるとともに、水難事故の起きやすい場所でもある。小さな島ではあるが、高さは約七〇メートルもあり、頂上にある白山神社までまっすぐ伸びた石段はきわめて急峻だ。またこうした場所のならいとして、自殺する者もいるらしい。白山神社の古い石段を上つて、猫の額ほどの境内に立つと、塔のつべんに立つたような感覚に襲われ、はるか眼下に横たわる周囲の海は、まさに(死)の表徴である。幼い象三にとつて、十メートルほどの足下に波が打ち寄せる「小さな入江風」の岩場も、おそらく同じような恐怖を感じさせる場所であつたに違いない。

しかしじつは、「象べえ」が砂遊びのバケツを落とした場所は、由良海岸ではないかもしれない。象三はこの場所を「S海岸」と記していて、これがインシャルだとすれば、由良から直線距離で三キロほどのところに

ある三瀬海岸であると考えられるのだ。三瀬海岸には、由良の浜をそのまま小さくしたような美しい入り江があり、海に向かって左手に大きな岩がそそり立っている。断崖の足下にはたしかに波濤が押し寄せていて、象三の記憶の中の風景と同じである。由良海岸のぼやけた写真と象三の記憶をそのまま結びつけることはできないのかもしれない。ただ、ぼやけた写真と像三の記憶が、きわめて近接した二つの時空に位置していることは間違いない。だから、写真から「何か不吉なもの」を受け取るわたしの感覚妥当性は、象三の証言にも裏付けられていることになる。写真の横光利一も、橋を渡つた後、白山島の断崖に立つて幼い「象べえ」に死の恐怖を感じさせたかも知れない。少なくとも、同じように水平線の彼方を見つめていたに違いない、とわたしは感じる。いったい横光利一は、「水平線の彼方」に何を見ていたのだろうか。

2 『夜の靴』とわだつみへの眼差し

〈敗戦〉という出来事を横光利一は次のように描写している。

八月——日

駆けて来る足駄の音が庭石に躓いて一度よろけた。すると、柿の木の下へ頭れた義弟が真つ赤な顔で、「休戦休戦」といふ。借り物らしい足駄でまたそこで躓いた。躓きながら、「ポツダム宣言全部承認。」といふ。

「ほんとかな。」

「ほんと。今ラヂオがさう云つた。」

私はどうと倒れたやうに片手を畳につき、庭の斜面を見てゐた。なだれ下つた夏菊の懸崖が焰の色で燃えてゐる。その背後の山が無言のどよめきを上げ、今にも崩れかかつて来さうな西日の底で、幾つもの火の丸が狂めき返つてゐる。

「とにかく、こんなときは山へでも行きませうよ。」

「いや、今日はずもう……」

義弟の足駄の音が去つていつてから、私は柱に背を凭せ膝を組んで庭を見つづけた。敗けた。——いや、見なければ分からない。しかし、何処を見るのだ。この村はむかしの古戦場のあとでそれだけだ。野山に汎濫した西日の総勢が、右往左往によちれあひ流れの末を知らぬやうだ。

一九四五年(昭和20)八月十五日の「終戦」から「大東亜戦争」勃発の十二月八日まで、夏から冬に至る四ヶ月足らずの疎開生活を記録した『夜の靴』(一九四六年十一月、鎌倉文庫)の冒頭である。これまでいくたびも引用された箇所だが、確かに見事な文章だ。真率平易であるとともに、きわめて技巧的な文章でもある。

たとえば、「駆けて来る足駄の音が庭石に躓いて一度よろけた」という義弟の心理を描写する冒頭の一文や、「庭の斜面」の背後にある山が「無言のどよめき」をあげるといふくだりの擬人法の使い方などは、いかにも横光利一らしい技巧的表現である。また、「ラチオ」「菊」「火の丸」というような、昭和天皇をめぐる換喩的な表現と、二度にわたつて使われている「西日」という言葉が、「大日本帝国」の敗戦を見事

に表象していく。さらに、これらの技巧的な表現に加えて、「ほんとかな。」という呟きや、「敗けた。——いや、見なければ分からない。しかし、何処を見るのだ。」という真率な内面の声が表出されることで、一連の印象鮮やかな叙述が構成されている。

横光利一が疎開したのは、山形県西田川郡上郷村(現、鶴岡市大字西目の山口地区)である。『夜の靴』に登場する殆どの人物には実名ではなく仮名が使われているのだが、書き手の「私」は「横光利一」として登場していて、実際の体験や見聞に基づいた記述が多いと思われる。したがって、引用の中に「背後の山」とあるのは、横光利一が滞在した山口地区の西方にある標高三〇七メートルの荒倉山のことだと考えてよい。そこには、かつて東羽黒の月山神社と一対をなした荒倉神社が鎮座している。また引用の結び近くに「古戦場」とあるのは、一五八九年(天正17)、この一帯の人々が太閤検地に抵抗する一揆を起したため、土地の豪族であった安部一族が討伐されて一山ごとごとく焼き払われたという故事を踏まえている。したがって、「その背後の山が無言のどよめきを上げ、今にも崩れかかつて来さうな西日の底で、幾つもの火の丸が狂めき返つてゐる」といふ描写は、この土地に刻まれた遠い敗戦の記憶を、現在進行形の「敗戦」と重ねたものであることになる。『夜の靴』は、この故事について次のように記している。

この村は平野をへだてた東羽黒と対立し、伽藍堂塔三十五堂立ち並んだ西羽黒のむかしの跡だが、当時の股賑をうかべた地表のさまは、背後の山の姿や、山裾の流れの落ち消えた田の中に、点点と

鳥のように^うぼろぼろ残つてゐる丘陵の高まりで窺はれる。浮雲のただよふ下、崩れた土から喰み出てゐる石塊のおもむき蒼樸たる古情、小川の縁の石垣ふかく、光陰のしめり刻んだなめらかさ、今も掘り出される矢の根石など、東羽黒に追ひ詰められて滅亡した僧兵らの^うり下り、走り上つた山路も、峠一つ登れば下は海だ。朴の葉や、柏の葉、杉、栗、檜、の雑木林にとり包まれた、下へ下へと平野の中へ低まつていく山懐の村である。義経が京の白河から平泉へ落ちて行く途中も、多分ここを通つて、一夜をこの山堂の中で眠つたことだらう。峠の中に今も弁慶の泉といふものもある。

横光利一が、源義経や弁慶まで呼び出して語ろうとしていることが何であるのかは明瞭だろう。「横光利一にとつて、(八・一五)は(解放)ではなく、文字とおりの(敗戦)だったのだ」(大久保典夫「横光利一の戦中・戦後」、一九八三年十月『解釈と鑑賞』)。

『夜の靴』の舞台となつた上郷村大字西目の山口地区は、東側に庄内平野の水田地帯を望み、西側に荒倉山を中心とする小さな山地を抱えた小さな集落である。荒倉山の向こう側へと峠を越えようと、すぐ日本海に出る。つまり、庄内平野の西端に位置する集落である。山裾のゆるやかな傾斜地に三十軒ほどの農家が点在していて、横光利一が疎開した佐藤松右衛門(作中「参右衛門」)宅は集落のほぼ中央にある。当時の松右衛門邸は建てかえられて残っていないが、間取りはわかつてゐる。村上文昭の『横光利一「夜の靴」の世界』(二〇〇四年九月

・東北出版企画)によると、横光利一が敗戦の日に「柱に背を凭せ膝を組んで」見続けた庭は、視界が開けた庄内平野の方角ではなく、荒倉山の方角、すなわち西にあつたらしい。だから、『夜の靴』が事実に忠実に書かれていると仮定すれば、横光利一は、夕刻に敗戦を知り、落日を眺めながら感慨にふけたことになる。また敗戦後の日々の中で何度も庭を眺めた横光利一は、過去の敗残者たちの記憶を喚起する西方に眼差しを向けるのを日課としていたことになるのだ。「敗けた。——いや、見なければ分からない。しかし、何処を見るのだ。」という問いに真摯に向き合おうとするなら、鶴岡市街へと続く庄内平野が眼前に開け、東京へと続く鉄路の中に羽前水沢駅がある東方を見るべきなのだろうが、『夜の靴』の「私」は、(現実)に背を向けるかのように荒倉山のある西方に眼差しを注ぎ続ける。

ただし、玉音放送があつたのが一九四五年(昭和20)八月十五日の正午だつたことを考えると、こうした眼差しのありよう自体、敗戦の心象風景を表現するための虚構であると見なした方がよいのかも知れない。「今ラヂオがさう云つた」という義弟の言葉が正午からの玉音放送を指すものだとなれば、直後に「今にも崩れかかつて来さうな西日」についての描写があるのは不自然だからだ。八月十五日は、正午の玉音放送に先だつて、朝から繰り返し「重大放送」が予告されていた。また、昭和天皇の声が放送された後には、放送員が「終戦の詔勅」を代読した上でこれまでの経緯を説明している。「今ラヂオがさう云つた」という伝聞によつて、夏の太陽が没する時刻によりやく敗戦に気づくという状況はちよつと想像しにくい。だからこの場面には、日の没

する西方への眼差しの中に（敗戦）という現実を描き出そうとする横光利一の作を読み取ることができたのだ。

言うまでもなく、西方とはこの場合、死者たちがいる（彼岸）のメタファーである。そして西方への眼差しの先にいるのは、おそらく太閤檢地の時代の死者たちだけではない。「追ひ詰められて滅亡した僧兵らの下り下り、走り上つた山路も、峠一つ登れば下は海だ」とある通り、庭の斜面から背後の山を見つめる『夜の靴』の眼差しは、終わつたばかりの戦争の死者たちが眠るわだつみにまで届いている。

たとえば、追いつめられた僧兵たちと源義経に言及した引用箇所直前に、「古戦場の残す匂ひのやうな、稀に見る美しい老婆」である利枝についての記述がある。七十歳の老婆である利枝の美しさの源は、「微笑」だという。「私」は、笑うときに口元から洩れる利枝の歯に、「ある感動を吸ひよせ視線をそらすことが出来ない」というのだ。そして利枝の微笑について、次のように書いている。

私はこの老婆の微笑を見ると、ふツと吹かれて飛ぶ塵あとの、あの一点の清潔な明るさを感じる。沖繩戦で末子が潜水艦に乗りくみ戦死したばかりである。もし婦人といふものに老醜なく、すべてがこのやうになるものなら、人生はしばらく狂言を變へることだらうと思ふ。そのやうな顔だ。

利枝の美しい微笑は、老婆の純粹さや質朴さを表出したというだけの単純なものではない。戦争で息子を亡くした悲しみに裏打ちされ

た、運命を肅々と受けいれる無垢な魂の発露として感受されているのだ。そして、「十七歳のときこの家から峠を越して海浜の村へ嫁入した老婆」である利枝自体が、「海」を表象する換喩的存在である。「漁村」や「魚」という言葉をともしなつて何度も言及される利枝は、「由良の老婆の利枝」と称されている。由良を知る者にとつて、利枝の微笑の美しさは、水平線に沈む美しい夕陽のイメージと、隠喩的關係におかれていると言つてもよい。したがつて、参右衛門の家の西側にある庭の斜面へと向けられた『夜の靴』の眼差しは、沖繩戦で没した利枝の末子をはじめとする戦争の死者たちが眠る、わだつみへの眼差しを伏在させているとも言える。「二十八戸の村から十七人出征してゐる。そのうち二人だけが帰つて来た」とか、「長女が樺太に嫁いでゐる折、引き上げ家族を乗せた船を、国籍不明の潜水艦が撃沈したといふ噂」とか、「長男で電信員として台湾へ出征中、死亡の疑ひ濃くなつて来てゐる」とか、「ここでも床の間に戦死した長男の写真が大きな額に懸けてある」といった形で、戦争の死者たちが点描されていることも考えに入れるれば、わだつみへの眼差しの持つ意味が決して軽いものではないことがわかるだろう。沖繩で死んだ利枝の末子と結婚するはずだった久左衛門の末娘「せつ」のところに、新しい縁談が持ち込まれていることを記した十月最後の日誌が、「山頂近くに一本高く見える檜の木に、日ごとに多く日本海の方から鶺鴒の群が渡つて来て止る」という情景描写から書き出されているのも、こうした読み筋の妥当性の傍証である。もちろん「鶺鴒」とは渡り鳥であり、次のような『夜の靴』の一節とも照応する。

日本の全部をあげて汗水たらして働いているのも、いつの日か、誰か一人の詩人に、ほんの一行の生きたるしを書かしめるためかもしれない、と思うことは誤りだろうか。

淡海のみゆふなみちどりながなげば心もしぬにいしへ思ほゆ(人麿)
何と美しい一行の詩だろう。これを越した詩はかつて一行でもあっただろうか。たとえこのまま国が減ぼうとも、これで生きた証拠になつたと思われるものは、この他に何があるだろう。これに並ぶものに、荒海や佐渡によこたふ天の川(芭蕉)

今やこの詩は実にさみしく美しい。去年までとはこれ程も美しく違うものかと私は思う。

柿本人麻呂の歌の意味がはつきりするよう表記すれば、「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ」となる。「淡海」は琵琶湖を指して日本海ではないが、千鳥も鶉と同じ渡り鳥であることを考えると、水を隔てて「彼岸」と対峙するというイメージが喚起される。琵琶湖が、幼時の横光利一が過ごした大津の記憶と結びつくことも無視できないし、同時に古の人々にとって「淡海」が大陸へといたる旅路の始発点であったことも見逃せない。

柿本人麻呂の引用の直前には、「独立問題の喧しくなつて来てゐた折に、「朝鮮のある作家」に「マラルメの詩論の感想を渡らしたという話も挿入されている。マラルメが「たとえ全人類が減んでもこの詩ただ一行残れば、人類は生きた甲斐がある」と思っていたという話で、人麻呂や芭蕉の詩句を紹介する契機として語られているのである。また、

マラルメについての「私」の発言のあとに、「朝鮮の作家は眼を耀かせて黙つてゐた。しかし、この作家はもう朝鮮へ去つてゐる」と書かれてゐる。『夜の靴』の庭で、西方へと注がれる横光利一の眼差しは、荒倉山を越え、わだつみの向こうに横たわる朝鮮半島にも及んでいと言えないだろうか。なにも柿本人麻呂が渡来人ではないかという説を持ち出そうというのではない。ただ、故郷喪失者の横光利一にとって、朝鮮半島は、一九二二年(大正11)八月二十九日、父梅次郎が脳溢血のため五十五歳で客死した特別な場所であり、西に広がる海の彼方への眼差しの由来を解く鍵の一つであることを指摘しておきたいだけである。『夜の靴』の中には、「八月——」と記された九つの節があるのだが、最後の三節のいずれかが父梅次郎の命日である可能性がある。

こうして見ると、『夜の靴』の横光利一が、荒倉山への道を十分ほど登つたところにある「鞍乗り」という場所に強い愛着を持つのも、西方に横たわるわだつみへの眼差しに由来するものと見なして差し支えないだろう。

この村には眺望絶佳の場所が一つある。そこが眼から放れない。その一点、不思議な光を放つてゐる一点の場所が、前から私を牽きつけてゐる。

それは私の部屋から背後の山へ登ること十分、鞍乗りと呼ぶ場所だ。そこは丁度馬の背に跨がった感じの眺望で、右手に平野を越して出羽三山、羽黒、湯殿、月山が笠形に連なり、前方に鳥海山が聳えてゐる。そして左手の真下にある海が、ふかく喰ひ入つた峡谷に

見える三角形の楔姿で、両翼に張った草原から成る断崖の間から覗いてゐる。この海のこちらを覗いた表情が特に私の心を牽くのだが、——千二百年ほどの前、大きな仏像の首がただ一つ、うきうきと漂ひ流れ、この覗いた海岸へ着いた。それに高さ一丈ほどの釈迦仏として体をつけたのが始まりとなり、以来この西目の村の釈迦堂に納つたのみならず、汽車で遠近から参拝の絶えぬ仏となつた。

『夜の靴』の「鞍乗り」に相当する場所は、実際には「鞍越峠」と呼ばれている。「十分」と書いてあるが、つづら折りの山道を登つてみると意外に遠い。車が通れるようにいちおう整備されているが、舗装されているわけではなく、通行する人もめつたにいない。ただ、確かに「眺望絶景」である。しかも傾斜がなだらかなつた峠の道のうち、本当に限られた一地点からしか海は見えない。その限られた場所にさしかかった時だけ、鞍越峠から見て西の方角にある細いV字型の峡谷の中にわずかに水平線が見える。水平線を見る人の背後には、国家鎮護、祖霊安鎮の霊山として知られる出羽三山が横たわることになる。

引用部分の最後にある「釈迦堂」和尚は「菅井胡堂」と言つて、『夜の靴』の中で「横光利一」「東条英機」「小林秀雄」などとともに実名が使われている数少ない人物の一人である。長男は台湾へ出征する途中、輸送船が爆撃を受け、生存が絶望視されている。また、釈迦堂に納められた仏像は、「どこかビルマ系の風貌」であると記されている。西に広がる海の彼方に菅井和尚の長男が眠つていて、さらに遠く離れたビルマのどこからか、海流のつて仏像が漂い流れてきたということに

なる。『夜の靴』の「私」が和尚と語らつた釈迦堂は、こういう形でわだつみの死者へとつながっている。「鞍乗り」から西方に望む海原は、父梅次郎が没した朝鮮だけではなく、アジア各地の戦場へとつながっているのだ。

一九四五年（昭和20）の山形県西田川郡上郷村大字西目という時空に定位する横光利一の眼差しは、このように、死者たちをめぐるさまざまな想念を孕んで、敗戦後文学としての『夜の靴』の叙述を吊り支えているのである。

3 敗戦後文学の中の横光利一

疎開先の西目を後にして敗戦後の東京へ戻つた横光利一を待ち受けていたのは、おそらくはルサンチマンをも孕んだ、ジャーナリストイックで苛烈な批判の嵐だった。文壇の新しい秩序が再構築されようという状況下、熾烈な権力闘争が展開される中で、文学の神様がうつつの敵役になつたのである。典型的な例として、杉浦明平の「横光利一論——旅愁」をめぐつて（一九四七年十一月『文学』）の中にちりばめられた悪罵のいくつかを引いておこう。

ドン・キホーテは巨大な風車と戦うが、矢代や東野は竹槍をふるつて手製の藁人形を突いているにすぎないから、喜劇としても余りに寒さむとしていすぎるような気がする。

これは正に痴呆の書といふべきだ。彼の心酔するドストイェフスキ

ーに次いで、かつ「ゴミのような作家」坂口安吾に先だつて「白痴」とでも題すれば、最もふさわしかった本である。

しかるにこういう狂人が瘋癲院に押込められず白昼の街路を横行するに委せたということは決して意味のないことではなく、何か誰かの役に立ったからだと推察しても誤りではない。誰に何の役に立ったか？

なぜわざわざここまで口をきわめて罵らなければならぬのか。横光利一について殆ど何も知らず、何の先入観も持たないままに『旅愁』を読み、杉浦明平の文章を読んだ時のわたしには、全くわからなかつた。これだけ手厳しく批判を加えながら、杉浦明平がかなり丹念に横光利一の文章を読んでいることも不思議だった(もちろん、熱烈な信者と苛烈な批判者は、表裏一体ではあるのだけれど)。批判の内容そのものよりも、こうして悪罵を投げつける杉浦明平という人物のありようにむしろ興味を覚えた。

その後、文学史的な知識を得ることで、横光利一を取り上げる場合、何らかのエクスキューズが必要であるという感覚がわたしの中に生まれた。一九四六年(昭和21)三月の新日本文学会創立大会で、横光利一と同様に「文学の世界からの公職罷免該当者」として名指しされた菊池寛や小林秀雄や武者小路実篤たちを論じようとするときとは、何か違う。もちろん、中野重治、平野謙、野間宏などについて考えようとするときとも、ちよつと異なる感覚である。こうしたわたしの感

覚は、一九六〇年代から七〇年代にかけて、母語としての日本語によつて、〈敗戦後〉という時空の中で精神形成を果たしてきたことに由来するのだろう。そしてこれは、限られた個人的な問題ではない。

たとえば、『横光利一事典』(二〇〇二年十月・おうふう)の「まえがき」に、編者である井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉の連名で、次のような言葉が記されている。

これまで横光が不当に貶められていた理由のひとつは、戦争中の戦争協力的な姿勢にあつた。大正末期、あたかも表現の革命児のような姿で華々しい文学的出発を遂げた横光は、思想的には意外に深い虚無を潜めていた。その虚無との戦いの中で、横光は次第にその虚無と無手勝流に対峙し、利害を超えて立つ人物像や思想を、自らのうちに育てていった。やがてその思想は、昔ながらの義理人情、祖先崇拜、祖先崇拜の日本的な結集である天皇崇拜、古神道へと結びついていった。横光の考える天皇は、人を抑圧し、他国を侵略する権力としての天皇ではなく、すべて権力的なものを受け止めて溶解し、真の平和を実現する純粋な精神の働きの象徴だった。それは、戦中の日本の現実とは相当にかけ離れ、夢想に近いものを持っていた。

巻頭に、こういう形でエクスキューズを用意しなければならぬというところに、横光利一と敗戦後文学と私たちをめぐりきわめて根深い問題が横たわっているのではないだろうか。(のなか・じゅん)

